

かぎ

津守 真

学校とかぎ、というのは、どういう関連があるのかと奇妙に思われるかもしれない。私の養護学校は東京の都心にあるので、玄関をあけると自動車がはげしく往来する道路で、気付かぬ間に子どもが外に出ると危ないから、玄関にも門にも鍵がかけてある。それだけでなく、建物の構造上、玄関に通じる廊下のドアにも鍵があり、子どもたちは、玄関の脇の職員室に行きたいときには、大人に頼むことになっている。できるかぎり自由に行けるようにしているけれども、これには限度があつて、鍵がなくて済めばどんなに気が楽だろうかと思う。実際には悩ましい問題である。

私が担任している五歳のT夫は、鍵に強い関心がある。私がつ持っている鍵を、どうしても欲しがつた。最初、T夫が私の鍵をつかもうとしたとき、ほとんど反射的に、私は、鍵を取られまいと強く握りしめて、手を引っ込めた。そうすると、T夫は、他のことは眼中になくなってしまい、私の鍵を取るまでは承知しなかった。大人がどうしても渡したくないものを手に入れること自体が目的になり、大人との葛藤感情だけが後に残つた。何度かそういう場面に接するうちに、私は、鍵のために、この

子どもと気持を通じ合うことが困難になっていたように思った。

そして、T夫との間では、鍵にどう対処するかと考えるよりも、憎しみを持たない、くつろぎ合う人間関係をつくることの方が、はるかにたいせつだと思った。

私は、T夫に鍵を渡した。そして、一緒に鍵あそびをしながら、ゆっくりとした時を過ごすことをつとめた。T夫は、その鍵でドアを開いたり閉じたり、何度もくり返し、そのたびにドアの後側を点検した。そのうちに、ドアをあけたときに顔を見合わせて笑い合う遊びもするようになった。

T夫と鍵の遊びをする間に、鍵に対する彼の関心のひとつは、ドアの裏側にあることが分ってきた。最初案じていたような、鍵をあげて外にとび出す心配はなかった。大人は、自分の不安を子どもに投影して、先走って考えるものだ。それから数か月の間に、T夫は鍵にとどまらず、物の裏側を見ることに夢中になることがしばしばあった。換気扇のファンがひさしの下に出ているのを見つけたT夫は、私の肩に立ち上って、回転するファンの裏側がどうなっているかを、何とかして見ようとした。裏側への関心に気付いていた私は、危なくないときにはファンの裏側をさわられるようにした。何日も試みるうち、遂に、室内の調理台の上のドラフトの内部が、ファンの裏側になっていることを発見した。T夫は、室内で換気扇のスイッチをいれ、急いで屋外に出て、回転するファンを眺め、また部屋に入ってスイッチを止めることをくり返した。表と裏の関係がわかったときに、このことは終わりになった。他にもいろいろある。T夫は、通路の人工芝の敷物を巻いて、その裏側を確かめた。散歩で、スニーカーマーケットに行くと、一目散にレジの後のドアをあけて裏側を見る。彼は、物を見たとき、見えていない裏側の存在を同時に見てしまう。

大人に対しても、にこやかに笑う大人の裏側に何かを隠していると疑っているように、私には思えた。これより一年前、T夫はガラスのコップにすれすれに水を入れ、それを持ち歩くので、まわりの大人は手を出しかけて、はらはらしながら見守ることがしばしばあった。実際、水がこぼれて床が水びたしになったり、グラスを落として割れたこともあった。当時担当していた先生は、「今にもこわれそうな人間関係の象徴」とこの行為を表現した。

それだから、私は、T夫に、何も隠しているものはないことを信用してもらう必要を感じた。だが、一体、私は本当に何も隠していないのだろうか。この鍵のような危機的場面になると、自分自身にもう一度問いかけねばならなくなる。私は、いつもポケットに鍵をいれ、T夫が手をつっこめば見つけられるようにし、鍵でドアを開閉する遊びを、何週間にもわたってつき合った。他の先生たちも、それぞれの場合に応じて、鍵をT夫に渡してつき合ってくれた。

ある日、T夫は、鍵を持ってM先生と公園に行った。池のほとりで、鍵が手から滑り、水の中に落ちた。M先生は、T夫と、一瞬驚いて立ち止まったが、鍵はどうとうみつからなかった。T夫は、もはや鍵を必要としないことを、無意識のうちに表現したのかもしれない。それから、T夫の関心はひととき鍵から遠ざかった。

三学期が終わる頃の日、大好きな散歩から帰ったT夫は、保育室に入ってえんえん泣いた。口をへの字に曲げ、涙がぼろぼろ流れる。T夫は、私の手をひいて庭に行き、ブランコで、私の膝にしっかり自分の身体を押しつけるように坐り、私の手に頬をよせて泣きつづけた。何か言うのと更に激しく

泣くので、何も言うことができなかった。こうして坐っていると、T夫は、悲しみの感情をはじめて体験しているのではないかと思えた。これまで、自分が追い求めていたこと以外には目が向かないように見えたこの子どもが、悲しみを知った、その時に立ち会っていることを私は自覚し、悲哀の時でありながら、私は満ち足りた気持ちで子どもを膝の上にして長い時間を過ごした。私への不信は、もはやとけてきているように思った。

このとき、何故、彼は悲しかったのか。それはよく分らないのだが、この日、帰りがけに母親が話してくれた。朝、下の妹と一緒に連れてくる途中、タクシーに乗ろうとしたら、T夫はバスに乗りたくて泣きわめいた。たまたま通りかかった見知らぬ人から、親の態度が悪いと叱責されたのだと、母親は情けなさそうに語った。自分のことで、母親が他人から批難され悲しんだことを、T夫も察していたのではないかと私は考えたのである。それは、他人から障害児と呼ばれる自分の存在の根底に関わることで、子どもに明瞭な意識はなくとも、人生の重さを心の底に感じていないわけではないと思う。いま鍵を使って、自由に空間を出入りすることに自信を持ってきたT夫であるが、それでもどうしても思うにまかせぬことがあることを知りはじめたのではないだろうか、私は想像するのである。このことは、これからの彼とのつきあい方を示唆してくれる。

T夫との間の鍵のことは、鍵の意味について、私にいろいろと考えさせてくれた。

子どもにとっては、鍵への欲求は、閉じられた扉が自分の前に立ちはだかる現実からはじまる。扉の向こう側の空間を開くのが、鍵である。鍵を握れば、空間は自由になる。鍵を握る男は、権力者で

ある。

鍵をめぐって、昔からいろいろのことが言われている。天国の鍵は、扉を叩く者に、だれにでも与えられている。鍵は、天国の門を開くだけでなく、地獄の門をも開く。扉があくと、不都合なことや悪魔もとび出してくる。現代は、核への扉が開かれて、世界は破滅の恐れにも面している。

他方、鍵は、自分の身を守るために用いられる。大切な物を入れた金庫には、しっかりと錠をかける。年頃の娘は、門に鍵がかかっているかどうかに敏感である。人が自由に出入りしては困る境界には、人々は番人をおき、鍵をか



ける。

日本の家屋は、外の自然と調和するようにつくられたから、鍵はいらなかった。西洋の建物は、自然と厳しく対立し、鍵のある扉で外部から区切った。現代では、日本の家もコンクリート建築になり、鍵を必要とする生活に変貌しはじめた。私共の養護学校も最近になって、消防法のために、仕切りの木製の引き戸を金属の扉に改修せねばならなくなったので、鍵の必要が増したのである。現代の生活は、ますます鍵から切り離せなくなりつつある。

子どもの教育の場では、できるかぎり、鍵による管理はしたくない。しかし、実際は、生活の理由のために、鍵を必要とするときがあることは否めない。また、鍵に対する感じ方、空間の束縛の感覚と自己防衛の欲求とは、子どもと大人ひとりひとりによって異なる。そこで分かることは、鍵の問題は、だれかがこうすると決めれば済む事柄ではないということだ。人間に関わることは、正しい解決法をひとつ見つければよいという性質のことではない。

鍵は、人が現代を生きるのに、それがどのような意味をもつのか、私共に問うている。鍵の問題は、それぞれの心の底に閉じこめておくのでなく、共同の場で自分を開いて問うてゆく性質のことなのだろう。こう考えて、私も、鍵と保育のことを書けるようになった。

(愛育養護学校)